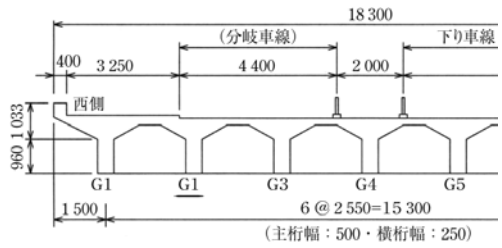
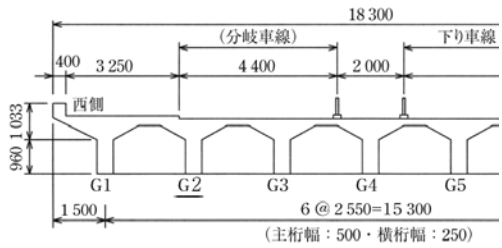


コンクリート構造診断士 試験問題と解説

正誤表

	誤	正
p.3 解説 2行	1984 年に制定させた。	1984 年に制定された。
p.5 問題文中2行 目下挿入表 最下段左	1977 (平成 09)	1997 (平成 09)
p.13 問題文 8行	凍害を受けたコンクリートは表面にスケーリング微細なひび割れ	凍害を受けたコンクリートは表面にスケーリング、微細なひび割れ
p.16 解説 6行	低下すること <u>じゃなく</u> 、	低下すること <u>ではなく</u> 、
p.18 解説 5行	近くの 0 ~ 10mm では 1.5 腐食発生限界塩化物	近くの 0 ~ 10mm では 1.5kg/m ³ 腐食発生限界塩化物
p.24 解説 8, 9行	24.7e10 ⁶	24.7×10 ⁶
p.24 解説 11,12行	9.21e10 ⁶	9.21×10 ⁶
p.28 問題文 9行	ゲルが <u>滲出</u> している。	ゲルが <u>滲出</u> している。
p.29 問題文 1行	主桁下 <u>箇</u> にひび割れが	主桁下 <u>面</u> にひび割れが
p.30 ポイント 2行	ピーク値や <u>触れ幅</u> の	ピーク値や <u>振れ幅</u> の
p.31 問題文 11行	P1 ~ P2 <u>開</u> に載荷される	P1 ~ P2 <u>間</u> に載荷される
p.37 ポイント 1行	電気化学的 <u>補修</u> 工法は	電気化学的 <u>防食</u> 工法は
p.37 解説 1行	電気防食工法: 0.01 ~ 0.03A/m ² , 脱塩工法: 1A/m ² である。 脱塩工法は電気防食工法に比べて 30 ~ <u>100</u> 倍	電気防食工法: 0.001 ~ 0.03A/m ² , 脱塩工法: 1A/m ² である。 脱塩工法は電気防食工法に比べて 30 ~ <u>1000</u> 倍
p.39 解説 1行	ひび割れは橋軸 <u>直</u> 角方向である。	ひび割れは橋軸方向である。
p.37 解説 6行	輪荷重の載荷により橋軸方向ひび割れが発生し、	輪荷重の載荷により橋軸 <u>直</u> 角方向ひび割れが発生し、
p.40 解説 2行	必要に応じて、 <u>鉄板</u> または	必要に応じて、 <u>鋼板</u> または
p.43 問題文8行	段落ししないように構造細 <u>査</u> が規定された。	段落ししないように構造細 <u>目</u> が規定された。
p.44 問題文2行	耐震診断の検討 <u>項</u> が入る。	耐震診断の検討 <u>事項</u> が入る。
p.45 解説 3行	部材 <u>靱性</u>	部材 <u>じん性率</u>
p.46 解説 4行	衛生的な破壊に	脆性的な破壊に
p.47 解説 10行	すべり沓の摩擦減衰と水平力ダンパーの履歴減衰という 2 重の減衰付加により、橋桁変位を抑制し免震化によって地震力の低減を図る <u>工法</u> である。	すべり沓の摩擦減衰と水平力ダンパーの履歴減衰という 2 重の減衰付加により、橋桁変位を抑制し免震化によって地震力の低減を図る <u>こと</u> である。
p.48 解説 11行	少ない場合は多工法に比べて	少ない場合は他工法に比べて
p.67 上から 13行	することができる <u>、</u>	することができる <u>。</u>
p.69 問題文10行	以下の <u>間</u> いに	以下の <u>間</u> いに
p.71 下から 6行, 16行, 24行	凍結防止材	凍結防止 <u>剤</u>
p.71 下から 13行	また、雨水が <u>浸入</u> に	また、雨水の <u>浸入</u> に
p.71 下から 3行	化学法によりの <u>アルカリシリカ</u> 反応性	化学法によりアルカリシリカ反応性

	誤	正
p.71 上から 6行	桁端部がから漏水	桁端部から漏水
p.76 上から 11行	施工できる。曲げ耐力を高める	施工でき、曲げ耐力を高める
p.76 上から 13行	観察可能とすることができる。	観察可能とすることができる。
p.77 問題文5行	主方向および横方向の	主方向および横方向の
p.79 解説 19行	基本原理は、次式に示すように、鋼材の腐食速度と	基本原理は、鋼材の腐食速度と
p.81 上から 9行	次式に示すように、鋼材の腐食速度と	鋼材の腐食速度と
p.83 上から 4行	表面被服工法、	表面被覆工法、
p.86 問題文2行	正しい組み合わせとなっている橋梁の数を選ぶ。	正しい組み合わせとなっている崩壊事故例の数を選ぶ。
p.86 問題文8行	C. PC 鋼材曲げ上げ部への塩化物浸入 D. PC グラウト充填不足による塩化物浸入	C. PC 鋼材曲げ上げ部への塩化物の浸入 D. PC グラウト充填不足による塩化物の浸入
p.86 解説7, 8行	Ynys-s-Gwas	Ynys-y-Gwas
p.88 問題文1行	全国平均で示したものである。	全国平均ごとに示したものである。
p.88 解説 3行	地域 4 は関東 1 区	地域 5 は関東 1 区
p.90 上から 1行	PC 橋の推移	PC 橋の将来予想
p.91 問題文1行	特徴的な改訂事項を記述したものである。A ~ Dを年代の古い順に並べた次の組み合わせのうち、適切なものはどれか。	特徴的な事項を記述したものである。A ~ Dを年代の古い順に並べたなかで、適切なものはどれか。
p.91 問題文6行	規定を導入した。	規定された。
p.94 ポイント 2行	「既存文献調査結果（平成 12 年 11 月）」によると報告されて	「既存文献調査結果（平成 12 年 11 月）」に報告されて
p.95 ポイント 3行	(CCD カメラ、ファイバースコープ法) があるが、	(CCD カメラ、ファイバースコープ法) がある。
p.99 問題文8行	鉄筋が樹脂でコーティングされている鉄筋に適用される。	樹脂でコーティングされている鉄筋にも適用される。
p.107 解説 5行	(2) 測定値は実践 I の	(2) 測定値は実線 I の
p.109 問題文4行	関する記述のうち、	関する次の記述のうち、
p.111 ポイント 1行	ASR の発生した	アルカリシリカ反応 (ASR) の発生した
p.114 ポイント 1行	ASR 以下 ASR と呼ぶ	以下 ASR と呼ぶ
p.117 ポイント 2行	腐食発正限界塩化物イオン濃度	腐食発生限界塩化物イオン濃度
p.121 問題文5行	基づいて復元設計を行った。	基づいて行った。
p.125 ポイント 2行	床版正面から	床版上面から
p.127 ポイント 1行	定着部を活動させない	定着部を滑動させない
p.131 解説 2行	終息したと考えてよい。	収束したと考えてよい。
p.131 解説 12行	外ケーブル費位置し	外ケーブルを配置し
p.131 ポイント 1行	構造計の変更	構造系の変更
p.134 解説 12行	複数形間を有する	複数径間を有する

	誤	正
p.140 解説 2行	抑制する <u>ので</u> あり,	抑制する <u>もの</u> であり,
p.140 解説 5行	凍結防止 <u>材</u>	凍結防止 <u>剤</u>
p.150 問題文4行	柱脚に 30 ～ 50mm 程度の隙間を設ける	柱頭および柱脚に 30 ～ 50mm 程度の隙間を設ける
p.157 下から 1行	供養後 50 年以上	供用後 50 年以上
p.163 問題文中 図(b)		
p.170 問題文中 図(b)タイトル	(b) <u>延長延長</u>	(b) <u>橋梁延長</u>
p.173 解説 6行	図 (B) において,	図 (b) において,
p.173 解説 10行	図 (b) において, ②に相当するのは	図 (b) において, ③に相当するのは
p.178 問題文7行	シリカゲルの確認では,	シリカゲルの確認では,
p.183 解説 1行	コンクリートの圧縮強度を推定は,	コンクリートの圧縮強度を推定 <u>する</u> 場合は,
p.186 解説 1行	空欄 (A) は「 <u>調査や復元設計</u> 」,	空欄 (A) は「 <u>復元設計</u> 」,
p.187 解説 6行	累積回数は <u>短く</u> ,	累積回数は <u>少なく</u> ,
p.189 上から 2行	腐食が認められ <u>こと</u> から,	腐食が認められ <u>ない</u> ことから,
p.196 問題文1行	PC T 桁橋の間詰コンクリート部に	PC T 桁橋の間詰コンクリート部に
p.202 表内選択肢 (3)右端欄	鋼板接着 <u>工</u>	鋼板接着 <u>工法</u>
p.206 問題文4行	削孔位置は,	削孔位置は,
p.206 解説 1行	再注 <u>入</u> 孔の	再注 <u>入</u> 孔の
p.217 解説 1行	帯筋ではなく中間拘束筋不足と	帯鉄筋ではなく中間帯鉄筋不足と
p.221 問題文6行	ピン支承, ピボット支承	ピン支承, ピボット支承
p.233 問題文8行	近くの鉄筋コンクリート造非構造壁	近くの鉄筋コンクリート造非構造壁
p.244 下から 13行	遊離泊灰	遊離石灰
p.244 下から 9行	弾性波法 (コンクリート強度, <u>空洞</u> 査)	弾性波法 (コンクリート強度, <u>空洞</u>)
p.246 下から 12行	その周辺の上下 <u>削</u> 構造の	その周辺の上下 <u>部</u> 構造の
p.246 下から 8行	傾向が見られたが,	傾向が見られたが,
p.248 下から 12行	安全性が大きく <u>低下</u> することが	安全性が大きく <u>低下</u> することが
p.255 下から 11行	腐食破断により <u>により</u> 1989 年	腐食破断により, <u>1989</u> 年
p.260 下から 13行	発生曲げモーメントと <u>致</u> した補強	発生曲げモーメントと <u>一致</u> した補強